

鶴林寺“聖徳太子伝”壁画

絵画室

鶴林寺は古くから聖徳太子にゆかりの深い名刹として、太子関係の多くの遺品を留めている事で有名であるが、ここに紹介を試みようとするのは同寺太子堂の壁面の一部に描かれている壁画のことである。昭和33年11月ここを訪れた際に、同寺真光院御住職の御厚意でこれを拝見する機会に恵まれたので、ここに簡単な紹介を試みることにした。

ここに聖徳太子伝とはあくまで仮称である。そこに描かれている御姿は聖徳太子十六才当時の柄香炉を手にされた孝養の像であり、しかもその周囲に三人の文官と数人の侍者を伴い、且つはその右端に毘沙門天の立像をも配したきわめて異形の図である。いましも孝養太子像を攝政像におきかえるならば、それはかの勝鬘經講説図にも似たものとして観せられるのであるが、或は用明天皇二年、太子十六才の折、三宝擁護についての諍論を行つた諸大臣の集いを描いたものかも知れない。何れにもせよきわめて類例の少い聖徳太子伝の一齣と云うことができるよう。

この太子堂はもともと法華（三昧）堂として成立したらしく、三間四面单層檜皮葺宝形作りに前面一間通り廊を付して礼堂とした南向きの堂宇である。正中年間の棟札により創建は藤原時代の天永3年（1112）と伝えられ、これと対峙する常行堂と共に同寺に遺る平安時代の様式をもつた美しい遺構である。内陣中央には須弥壇があり积迦三尊と四天王を配し、その背後の来迎壁の表裏には积迦八相の主要二場面

である靈鷲山説法図と仏涅槃図が描かれている事は著名である。この他にも四維柱や小壁の部分におぼろげながら諸仏の描かれている様が見受けられる。これらの諸壁画は何れも檜板の素地の上に粉地を施してその上に直接墨彩されたものであるが、今は遺憾ながら後世の香煙のやにのために燻化して見きわめ難いまでになつており、一見漆地上に彩色を施したかと思われる程である。これらは創建当時の作と見て差支えないものである。

今ここにのべようとする太子伝の一場面は堂内の須弥壇向つて右脇、東側壁面の一間を利用して描かれたもので、その制作時期は後にも述べるようにこのお堂の成立当初にまで溯るとは思われないが、それでも全体が古い仏殿型の厨子に格納されて来た為に、時代を経ている割には変色が少く、秘仏として尊崇されて来た様も窺われる。だが却つて香煙のやにによる膠化がなかつた為に、逆に顔料の接着がおとろえて剥落のひどいのが惜まれてならない。（最近幸にも剥落止めが実施された。）

今画面の旧状を復原的に考察して見ると、中央やや左寄りの台盤上

のがあり、又何れかと云えば天平風の古様を秘めている点で注目される。なお毘沙門天の背後にも一人の文官を認めうる。

持する姿に描かれる。髪をみづらに結い簪の毛を頬に垂らしている様は、朱衣に遠山袈裟をまとつたその姿勢と共に太子像としては古様に属し、仁和寺聖僧図巻中の像容などを想起せしめるものがある。太子の前には脚付香炉が置かれ、それを囲んで黒衣と白衣の二人の文官が笏を手挿んで対坐する。又太子と対峙する位置には朱衣の文官が侍坐し、太子の前に手笞の如きものを差出す姿勢をとる。その上方には更に少くとも三人の侍者を数えうるが、その細部は定かではない。ただこのうち二人が唐扇を持つていてことだけはわかる。又太子の背後にこのうち一人が唐扇を持つていてことだけはわかる。

画面は全面に亘って白土下地をなし、彩色はきわめて淡薄に施されている。色料としては群青、綠青、朱、弁柄が主たるものであり、それ以上に墨の効果を強く活かしている点が注目される。青、綠などはしばしば巧に隈取りとして使用され、又纏綱の手法も所々に活用されているが、全体に裝飾性は少く、彩色・文様共に煩瑣でなく、きわめで大柄な味わいが好もし。加えて諸所に見られる肥瘦の少い墨線のタツチは技巧的にもきわめて高度であり、筆者の凡庸ならざることを証するに足る。かかる優れた筆致と鷹揚な画風とはその類例稀であり、宝山寺藏弥勒菩薩像などに多少の親近性を見出すものであるうか。時代は遅くとも鎌倉前期（13世紀前半）を降ることはないと思われる。

衣、緑衣、青衣を着て
幡などを執つて立つ。

なお興味をそそられるのはこれらの人物と一

見独立して画面の左端
一杯に描かれている岩

孝 爰 太 子 像 (部分)

なりの形式化を示して
いるとは云え、その細
緻な筆には見るべきも

(附記) 尚これを囲う古都風の宮殿型厨子は建物に取り付けられているが、素人目にもすぐれたものに見受けられる。又この厨子の上部には「康暦元八月五日」の刻銘を備えた弥勒菩薩半跏思惟形の懸仏があるのも美しい。(カット)